

Title	ラムトン『ペルシア語文法』を日本人としてどう読むか 下
Author(s)	勝藤, 猛
Citation	大阪外国語大学学報. 45 p.59-p.81
Issue Date	1979-02-19
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80752
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ラムトン『ペルシア語文法』を

日本人としてどう読むか

下

勝 藤 猛

Notes on Lambton's *Persian Grammar*
(continued)

Takeshi KATSUFUJI

یادداشت‌های کتاب دستور زبان فارسی بقلم خانم دکتر آن لامبتون

نویسنده : تاکشی کاتسوفوجی

درست بیست و پنج سال یعنی ربع قرن است که خانم دکتر لامبتون،
ایران‌شناس بزرگ انگلیستان کتاب دستور زبان فارسی را چاپ کرده است.
بعد از آن دانشجویان بیشمار جهان برای تحصیل زبان فارسی از آن استفاده
کرده اند.

در ژاپن سطح ایران‌شناسی هنوز بالانیا آمده تعداد فرهنگ‌ها و کتاب‌های
دستور فارسی هم محدود است. به این جهت برای دانشجویان ژاپنی که
قصد یاد گرفتن زبان فارسی را دارند مراجعه به فرهنگ‌ها و کتاب‌های دستور
اروپائی ضروری است. با استفاده از این کتاب دستور می‌توان زبان فارسی
خود را بمراتب قوی تر نمود.

من می‌خواهم برای دانشجویان ژاپنی این کتاب را توضیح بدهم.
البته زبان فارسی و زبان انگلیسی از یک ریشه می‌باشد اما گاهی زبان فارسی هم
با زبان ژاپنی شباهت دارد و بی فایده نمی‌دانم که زبان فارسی را با زبان ژاپنی
مقایسه کنم. امیدوارم دانشجویان مطالب این کتاب سودمند را تا حد امکان
درک نموده و بکار ببرند.

第13課

この課ではペルシア語動詞の時制の総まとめをしてあるので、非常に重要である。まずその内容を表にして示す。数字は本書の節で、古典文を扱った箇所は「古」と示す。

1	不定詞	<i>Infinitive</i>	(a) – (f) 古 (d) 以下
	短不定詞	<i>Short Infinitive</i>	(a) (c)
2	過去分詞	<i>Past Participle</i>	(a) – (c)
3	現在分詞	<i>Present Participle</i>	(a) – (b)
4	行為者名詞	<i>Noun of Agent</i>	
5	過去	<i>Preterite</i>	(a) – (h) 古 (e)
6	過去進行	<i>Imperfect</i>	(a) – (f) 古 (f)
7	現在完了	<i>Perfect</i>	(a) – (d)
8	過去完了	<i>Pluperfect</i>	(a) – (c)
9	現在	<i>Present</i>	(a) – (e)
10	一般現在	<i>General Present</i>	古
11	仮定法現在	<i>Subjunctive Present</i>	(a) – (l)
12	仮定法過去	<i>Subjunctive Past</i>	(a) – (h)
13	未来	<i>Future</i>	(a) – (b)
14	命令	<i>Imperative</i>	
15	祈願	<i>Precative</i>	

これから各節ごとに要点を拾って説明する。

1 節

(a) 不定詞・短不定詞は名詞として使われる。

「知識あること *dānā shodan* は力あること *tavānā shodan* である」 不定詞

「彼の進歩 *pīsh-raft* は称賛に値いする」 短不定詞

(b) 不定詞は前置詞 *be^h* を伴って目的を表す。

「彼は自分のきょうだいに会いに *be^h dīdan-e-* 行った」

(c) 短不定詞は非人称動詞として用いられる。

Mīshavad kard. 「できる」(だれができるというのではなく、一般的に) 56頁12節参照

2 節

(a) (b) 略

(c) 一つの主語に対して動詞が二つ以上あって、それらの時間に前後があれば、前の動詞を過去分詞にする。

Nāme^h-ye-shomā rasīde^h (va) kh^wānde^h shod. 「あなたの手紙が着いて、読まれた。貴翰

落手拝読仕り候」この過去分詞は日本語では「……して」と訳せばよい。「そして」に当る *va* はあってもなくてもいい。

3 節

(a) *Kh^wāhān-e-salāmātī-ye-shomā hastam*. 「貴下の御健康をお祈り申し上げ候」手紙文に用いられる。

4 節

bakhshīdan 「与える, 許す」の行為者名詞 *bakhsh-ande^h* が形容詞として用いられ, 「気前のよい」の意となる。名詞 *bakhshesh* は中東一帯で「心づけ, わいろ」の意で用いられる。

5 節

(b) たったいま完了した動作を示す。例えば, 彼がいま来たばかりであれば, 日本語で「来た」というように, ペルシア語でも *Āmad*. という。来てからしばらく時間がたっていれば, 「来ている」*Āmade^h ast*. という。

(c) 「イギリスへ行ったら *raftīd*, 私に手紙を下さい」は, 65頁5節(a)「彼が来たら *āmad*, 言いなさい」と同じで, 未来の可能な二つの動作のうち時間的に早いものに過去形を使う。

(d) 今すぐしようとする動作を過去形で示す。

Āadam. 人から呼ばれて「すぐ参ります」

Raftam. 家を出るとき「行って参ります」

(g) (h) の用例をみると, ペルシア語の時制の用法は英語よりも日本語に近い。

Hāzer shodam. 「用意ができました」

Teshne^h shodam. 「のどがかわきました」

Ketāb-am rā farāmūsh kardam. 「本を忘れて来ました」

Zūd āmadīd. 「早く来ましたね」

6 節

(a) の一番下の例文「おそらく彼らも私のもっている安楽の手段をもちたいと願っていたであろう」は本書176頁に載せてあるモハンマド・ヘジャージー「希望」の一文である。ただしこの例文での「安楽」*rāhatī* が, 後者では *tanbalī* となっている。

7 節

(a) 「シャー・アッパース（サファヴィー朝の王, 在位1587—1629, イスファハーンを都に定めた）がこの隊商宿を建てた」の「建てた」は, 日本語・英語とも過去形にするが, ペルシア語では現在完了にする。それは話者が「建てた」時代の人でなく, その当時のことを知らないからである。もし知っていれば過去形にする。同様の理由で「サアディーは言った」（本書の例文）, 「京都は日本の首都であった」も現在完了にする。

(c) 「あなたが家に帰りつくまでに, あなたはすべてのお金を使ってしまうでしょう」の「使ってしまうでしょう」には, 英語では未来完了が用いられるが, ペルシア語では現

在完了となる。57頁17節(b), 157頁18節(ii)にも同様の例文がある。

8 節

(a) 過去の二つの動作または状態を述べるのに、両者が時間的に接近しているなら、両方とも過去形にすることが、146頁過去形の用法(f)で述べられた。すなわち

「彼が話を終えた *tamām kard* とき、私は返事をした *javāb dādam*」これは彼の話が終るとすぐ私が返事をしたというのである。

これに対して両者の間に時間の経過があれば、先の方を過去完了にする。

「あなたが書いてあった *neveshte^h būdīd* 手紙を、私は読みました *kh^wāndam*」あなたが手紙を書いてからそれが私の手元に届くまでに日時があるからである。

9 節

(d) 現在形が未来を示すのは口語的文脈においてである。

10 節

一般現在の説明はさきに25—26頁でもなされた。その形は直説法現在からその接頭辞 *mi-*を取り去ったものである。その用法に二つあり、一は疑問の要素を含まない一般的叙述であり、他は仮定法現在と同じで *be-* がついてよい。前者は古典文で用いられ、現代文なら直説法現在の形をとる。前者の例文で本書にないものを示す。

Kābol bī-zar bāshad, bī-barf na^h. 「カーブルに^は雪はなくてもいいが、雪がなくてはならぬ」山の雪がとけて水となり、カーブルの住民を養っているということで、乾燥地帯の人文地理学上重要な問題を含むアフガニスタンの諺である。

11 節

(b)

「私の願いを聞き入れて下さることを希望します」

「彼らは行くことに決心した」

の例文について、著者は「目的」 *purpose* を表すものとしているが、(c)が「目的」 *final* を表すものであるから、それと区別するために、58頁18節「彼は自分のきょうだいに手紙を書くことに決めた」の従属節を「名詞節」 *substantive clause* と呼んでいる同じ呼び方をここでも使う方がわかりやすい。

(c)の例文について次の相違に注意したい。

Īn kār-rā hālā be-konīd. 「この仕事は今やれ」(「今」を強調) *rā* は「は」に当る。

Hālā īn kār-rā be-konīd. 「今はこの仕事をやれ」(「この仕事」を強調)

Be-ū farmūd tā raft. 「彼はかれに行くように命じ、かれは行った」*ta* は目的節を導く接続詞で、その後の動詞の時制が直説法過去であるから、行くように命ぜられたかれは実際に行ったのである。もしこの時制を仮定法にして…… *tā be-ravad* とすれば、「彼はかれに行くように命じた」だけであって、かれが本当に行ったかどうかはわからない。

ここで直説法を用いることは古典文においてであると著者はいうが、現代文でもしばしば見られる。

12節

(b) 「医者が着くまでに、病人は死んでしまうでしょう morde^h bāshad」ここで仮定法過去を用いるのは古典的用法である。159頁一番上に同様な例文がある。現代文でなら現在完了にすることが7節で述べられた。

13節

未来を用いる場合として次の二つが示されている。

(a) 未来の動作または状態をいう場合、「彼は明日行くでしょう」

(b) 確実性を示す場合、〔だれかが扉を叩いたとき〕「これはアリーにちがいない」

ペルシア語における未来形の用法はかなりむずかしく、多くの用例から帰納的に判断するほかない。一言でいうなら、未来をいうには、口語的文脈では現在形が、文語的文脈では未来形が、それぞれ用いられる。したがって未来形をまったく使わなくてもペルシア語による意思の疏通は可能である。したがって初学者は未来形を使わなくてもよい。

14節 命令形 説明略

15節

祈願法で一つ覚えておくべきものは būdan のそれ bād で, zende^h 「生きて」とともに用いられ, Zende^h bād! 「万歳」となる。アフガニスタンやパキスタンでは zunda^h となる。

16節

「……すればよいのに」という希望を表すのに、それが実現可能なら時制は仮定法現在、不可能なら過去進行形または過去完了にする。

17節

ペルシア語の話法は日本語と同じで直接話法であるから、日本人にはわかりやすい。ただ代名詞は間接話法のようにしてもよい。また「言った」の次に接続詞 ke^h を入れても入れなくてもいい。

18節

ta が導く「時の従属節」についての詳細な説明である。なお ta が導く「時」の従属節は主節より前に、「目的」の従属節は後に来ることに注意したい。

19節

禁止を表すのに、man' と qadaghan を使えば動詞を否定にし、mamnū' を使えば肯定にするという説明がある。

「彼がそこへ行かないよう、私は禁止した man' kardam」

「そのうちにこれ以上私が母の家へ行かないよう禁止された qadaghan shod」

「だれもそこへ行くことは禁止されていた mamnū' būd」

しかしこの説明に反する用例もある。

Hakīm qadaghan karde^h ke^h bā ū harf be-zanand. 「医者是人々が彼と話をすることを禁じた」(ヘダーヤト『三滴の血』)

Be-meidān na-rasīde^h kūche^h-ye-ākhar-e-dast-e-rāst 「十字路の手前の右手の最後の小路」

meidān とはイランの都市の大きな十字路の真中に庭を作り、銅像が立っていたりするところである。大通りを khiābān といい、それに直角に交る小路を kūche^h という。

「……の手前」 be^h … na-rasīde^h の対、「……を通り過ぎて」は az … gozashte^h である。例えば

az meidān gozashte^h kūche^h-ye-avval-e-dast-e-chap 「十字路を過ぎて左手の最初の小路」

これらの表現はイランの都市で道を教えたり教えられたりするときに覚えておくといよい。

20節

āmadanなどを非人称的に用い、意味上の主語を接尾代名詞の位置におくもので、ペルシア語らしい構文であるから、覚えておいて使うといよい。この場合 āmadan はつねに三人称単数形である。

Kh^wosh-etān āmad? 「お気に召しましたか」

Bad-am na-mīāyad. 「きらいではありません」

23節

ペルシア語動詞現在形は現在をも未来をも意味する。とくに現在を言いたいときには dāshtan の活用形を付加する。例えば mīnevīsam は〔私が〕「現在書いている」も「これから書く」も意味する。前者の意味をはっきりさせるためには, dāram mīnevīsam という。この場合, al-an 「現在」という副詞を伴うのがつねで, 「今ちょうど……しているところだ」と訳する。

26節

古典ペルシア語において過去形に be- を付けると, 完了・終結の感じを強く与える。この用例を筆者はアフガニスタンのヘラート近郊の農村カバールビヤーンで知った。be- よりも bu- と発音されていた。

第14課

この課は1節で会話, 2-4節で口語的発音を扱っている。しかし会話について注意すべきことは無数にあって, とてもこの一課で述べつくすことはできない。ただ本書を一つの手引きとして会話の法則を自分なりにまとめることができよう。まず敬語と謙譲語についてまとめてみよう。

1 節

動詞	普通	尊敬	謙譲
行く	raftan	tashrīf bordan	} khedmat rasīdan
来る	āmadan	tashrīf āvardan	

居る	būdan	tashrīf dāshtan	
言う	goftan	farmūdan	‘arz kardan
書く	neveshtan	marqūm farmūdan	
わかる	fahmīdan	moltafet shodan	
		tavajjoh kardan	
		motavaje ^h shodan	
与える	dādan	marḥamat kardan	taqdīm kardan
死ぬ	mordan	fout kardan	

169頁 (d) – (f) は挨拶の言い方である。ペルシア語に限らず挨拶は好意の表現として人間関係になくってはならぬものである。出会ったとき、別れるとき、その他さまざまな場合のいろいろな表現がある。その場にふさわしい丁寧さの程度をわきまえる必要がある。内容のない儀礼的会話においては、おきまり文句を並べるだけで容易に会話が進行する。

ペルシア語でも日本語と同じく「どこへお出かけですか」と問うことがある。これは質問というよりは挨拶であり、必ずしも本当に相手の行先を知ろうとするのでないから、それに答える必要はない。

170頁 (m) (n) の Kh^wāhesh mīkonam. Ested‘ā mīkonam. Ekhtiyār dārīd. はいずれも日本語の「どういたしまして」に当り、会話でしばしば用いられる。つまり、感謝されたとき、ほめられたとき、あやまれたときの答えとして使われ、その口調も日本語と同じく、やや長くのばしていいいに発音する。

171頁 (q) Khodā na-konad. 「神よそうするな」は縁起の悪いことを否定するのに用いられる。例えば

甲「もし私の父が死んだら」 乙「神よそうするな」

または「Khodā na-kh^wāste^h 神が望まないことですが、もしあなたが病気になるたら……」

ペルシア語会話には優雅なきまり文句が多い。それらをうまく使うことは会話を上品にする。

例えば172頁脚注

Jā-ye-shomā khālī [būd]. 「あなたの場所は空〔であった〕」

khālī のかわりに sabz 「緑」でもよい。「あなたが坐っていないからそこに草が生えた」の意。話題のことがあったとき、相手がそこに居なかったのなら、その相手に対する思いやりの表現で、「そのときあなたは残念ながらいらっしゃいませندでしたが」と挿入的に用いられる。

また電話で話していて「そのまましばらくお待ち下さい」というのを Gūshī khedmat-e-tān bāshad. 「受話器があなたの奉仕にあれ」というのも上品な表現である。

2 節

172 – 3 頁(d)は口語的発音において現在語根の一音節が脱落する例である。本書に挙げられて

いる以外の例を示す。

mī-tavān-am 「私はできる」 → mī-tān-am
mī-rav-am 「私は行く」 → mī-r-am
mī-shav-am 「私はなる」 → mī-sh-am

173頁(e) 否定の接頭辞 **na-** が動詞の接頭辞 **mī-** の前につくと、**ne-** となる。これは **na-mī-** つまり **a→i** より、**ne-mī-** つまり **e→i** が口の形の变化が小さくてすむからである。アフガニスタンのペルシア語では **mī-** はたいてい **mē-** となるため、**na-mē-** となり、**na** はそのままである。**a→e** の变化が小なるためである。アフガニスタンでも、語根の母音に **ī** があれば接頭辞は **mē-** でなく **mī-** であり、それにつく否定は **na-** のままである。

例 **na-mē-kon-am.** 「私はしない」
na-mī-gīr-ad. 「彼は取らない」

3 節

Manzel būdam, dīgar. 「私は家にいたっていうのに」私が家にいたことを信じようとしなない相手を非難する気持ちが **dīgar** にある。

Ū ke^h mord. 「彼はねえ、死んだよ」この **ke^h** に意味はない。音節をふやして聞き手に時間的余裕を与えるためである。

アフガニスタンではこの場合、**ke^h** のかわりに **khō** を用いる。

4 節

一音節だけで意味を表せるのに、さらに人称接尾代名詞をつけ加える。これも全く音節をふやして聞き手の聞き取りを容易にするためである。

Būd-esh. 「彼はいたよ」
Nīst-esh. 「そうじゃないよ」
Mord-esh. 「彼は死んじやったよ」

数の「一」はアフガニスタンでは **yak** と発音されるが、イランでは **yek**、その口語では **k** が落ちて **ye** となる。

出典解説

本書に引用された古典の語句の出典をできるかぎり調べてみた。不備な箇所は御教示を乞う。訳文は直訳である。〔 〕は補ったところ。人名とその後の形容語（父または出身地の名）の間にはエザーフェが入るが、ここの転写では省略した。サアディー「ばら園」の第1章からの引用がもっとも多い。

62頁

〔生まれ尊い〕フェルドウシーは何と立派に言ったか

〔一彼の清らかな墓に恵みあれ―
「いじめるな蟻を、それは餌を運んでいる
命あるものだ、美しい命はすばらしい」と〕
Sa‘dī, *Būstān* (果樹園) 2 章

75頁

〔あらかじめ気をつけておれ〕
時がどんないたずらをするか見よう
Ferdousī, *Shāhnāme*^h (王書)

貴重な人生はこのことに費された
夏に何を食い、冬に何を着るかを考えて
Sa‘dī, *Golestān* (ばら園) 1 章36話 (以下 I – 36のように表す)

おお、私の姿はおまえには卑しく見えようが
大きいことがいいことだと考えるな
「ばら園」 I – 3

81頁

〔多くの飢えた者が眠ったが、それが誰かだれも知らない〕
多くの命が失われた〔が、だれもそれに涙を流さない〕
「ばら園」 I – 16

127頁

できるかぎり人の心をかき乱すな
一つのため息が全世界をかき乱すことがあるから
「ばら園」 I – 26

131頁

ある圧政者が眠っているのを私は見た、〔昼の日中に、
私は言った「これはたたりだ、眠らせておくのがよい」と〕
「ばら園」 I – 12

132頁

私は聞いた、羊は長者が

救ったのだ〔狼の口と手から〕

「ばら園」Ⅱ－31

136頁

うるわしのシーラーズよ、〔その類いなき姿よ

神よそれを亡びより守れ〕

Hāfez (A. J. Arberry, *Hāfiz Fifty Poems*, 1962, p.61)

137頁

〔一国の政治がおまえに何の役に立とうか〕

おまえが死ぬことは人民を苦しめるよりまし

「ばら園」Ⅰ－11

139頁

ばらはわずか五、六日もつだけだが

〔私の『ばら園』はいつまでも美しい〕

「ばら園」序

140頁

もしこの射手^{射手}の手から逃れられたら

私は老婆^{老婆}のあばら家の隅に住んでもよい

「果樹園」6章

明日、日が高く上れば

私は鎧をとって戦場に赴き、アフラーシアーブと戦おう

「王書」

143頁

ロクマーンは言った「彼らに知恵の言葉を語るのはなさないことだ」と。

「ばら園」Ⅱ－19

144頁

これ以上、彼の内面の傷を、非難によってかきむしり、塩をふりかけるのは、好ましいとは私

は考えなかった。

「ばら園」 I - 16 (版本によっては「彼の内面」 *darun-esh* でなく, 「貧者」 *darvish* となっている。綴りが, 前者はヌーン, 後者はイエーである違いである)

私の人生の残りを, そのことへの感謝の責任からぬけ出ることにはできない。

「ばら園」 I - 16

王は全員を殺すよう命じた。

「ばら園」 I - 4

146頁

進めば助かり, 眠れば死ぬ。

「ばら園」 II - 12

150頁

私が言うことや書くことに偏見がないことを, 神は知っている。

Beihaqī, Tārīkh-e-Beihaqī

彼らが欠点や誤りを見つけたら, 言ってよい。

同上

王は彼が言うことは何でもするのに

その彼がよくないことを言うのはなさない

「ばら園」 I - 1

151頁

蹄の跡が見失われるよう

トルコマン人よ, 蹄鉄を逆の向きに打て

Qā'ānī Shīrāzī

156頁

その地方の諸国の政治家たちは, 彼ら (アラブの盗賊) の害を除くことについて次のように相談した。この集団がこのままでいつまでもいるなら, 彼らを制御することは不可能になってしまうであろうと。

「ばら園」 I - 4 下記, 162頁の引用文の続き。

157頁

一本の若木が蔭を作る大樹になるまでに
何回分の水が灌漑溝を流れることか

Mas'ūd Sa'd

一本のろうそくが尽きるまでに、百匹の蛾が焼け死ぬ。

Ṣā'eb Tabrīzī

158頁

平和を守れるかぎり、戦争の扉を叩くな。

Nāṣer Khosrou (S. Ha'im, *Persian-English Proverbs*, p.108)

私に命のあるかぎり希望がある

いつかは君が太陽となるであろうと

Gorgānī, *Vīs o Rāmīn* (ed. Moḥammad Ja'far Maḥjūb, p.234)

159頁

解毒剤をイラクから運んでくるまでに、蛇に咬まれた人は死んでしまうであろう。

「ばら園」 I - 16

161頁

敵と味方を区別するためには

人生が二回必要であろう

‘Emādī Shahriyārī

もし私が自分の言ったことを実行していたら

善良で敬虔な人になっていたであろう

「ばら園」 II - 23 (*Kolliyāt-e-Sa'dī*, ed. ‘Abd al-‘azīm Qarībにだけこのペイトがある)

木がもしあちこち動けるものなら

鋸の専制や斧の圧迫を受けないだろうに

Anvarī (*Dīvān-e-Anvarī*, ed. Sa'id Nafīsī, p.121)

162頁

もし国家に舌があるなら

この悪魔や野獣に泣き叫ぶであろう

Kalīle^h o Demne^h (ed. ‘Abd al-‘azīm Qarīb, p.12. ただし第2のメスラーは *Ṣanā-gū-ye-shāh-e-jahān bāshadī* 「世界の王を称賛するであろう」となっている。このペイトを引用したいくつかの本もそうである)

アラブの盗賊の一団が山の上に居をかまえていた。そして隊商の通路は塞がれ、その地方の百姓たちは彼らの計略を恐れ、スルターン軍の軍隊は敗れた、彼らが難攻不落の隠れ家を山頂に手に入れていたがために。

「ばら園」 I - 4

第二部 アラビア語の要素

序 論

以上第1課から第14課までが第一部であり、これから第二部に入る。ペルシア語圏は7世紀中頃、アラブ族の侵入により、アラブ人とイスラム教とアラビア語の支配下に入り、ペルシア語がアラビア文字で表記されるようになって、「近世ペルシア語」の段階に入る。とくにイスラム教の受容により、宗教的用語をアラビア語のままで採用したため、ペルシア語の中に多くのアラビア語が混入するに至った。『コーラン』をアラビア語のままで読誦することが一般人の教養であり、知識人はアラビア文そのものも綴ることができた。このアラビア語とペルシア語の関係は、中国語と日本語の関係になぞらえるとわかりやすい。

近世ペルシア語の古典ペルシア語の著作の中にはアラビア語の文章がしばしば含まれているが、現代ペルシア語ではこういうことはない。ペルシア語圏の学校でアラビア語の授業が行われていることは、わが国の漢文の授業と似ている。現代ペルシア語を扱うのに、アラビア語の知識は、語・句までで、文までは不要である。本書第二部でラムトンはアラビア語についてかなり詳細な説明を与えてくれているが、そのすべてを学習しなくても、とくに重要な箇所を拾うだけでも、現代ペルシア語をよりよく理解するのに役立つ。

アラビア語とペルシア語の音韻の比較をごく簡単に次のように示すことができる。

母音・二重母音

ペルシア語

アラビア語

ī

i, ī

e

a	a, ā
ā	
o	
ū	u, ū
ei	ai
ou	au

子音

下のペルシア語の各列の音は、文字は違うが音は同じである。しかしアラビア語では音もすべて違っており、翻字 *transliteration* もペルシア語と違うことがある。下にこれを表示する。横線はペルシア語のと同じ翻字である。

ペルシア語	アラビア語
t, <u>t</u>	—, <u>t̤</u>
s̤, s, s̤	<u>th</u> , —, —
h̤, h	—, —
z, z̤, z̤, z̤	<u>dh</u> , —, d̤, z̤

また単語のアクセントもアラビア語とペルシア語ではかならずしも同じでない。アラビア語起原のペルシア語はほとんど最後の音節にアクセントがある。

筆記体を比べるに、アラビア語はごつごつしていて男性的、ペルシア語は優雅で女性的である。

Nahj ol-Balāghe^h 『言葉の大道』、アリーの説教集。

3 節 太陽文字 *sun letters* の音は、歯音 *dental* および歯茎音 *alveolar* である。

5 節 長母音の表し方をまとめると下のようになる。

ā 子音にファトへの記号をつけ、その後にアレフを書く。

ī 子音にキャスレの記号をつけ、その後にイエーを書く。

ū 子音にザンメの記号をつけ、その後にワーウを書く。

ā には上のほかに次の表し方もある。

子音の上に短い縦棒をつける。 rahmān

子音の上の短い縦棒とその後のワーウ。 zakāt

単語末で子音の上のファトへとその後のイエー。 hattā

8 節 ペルシア語のハムゼの用法は第一部の序論 6 節に、母音と母音の接続を示すためと説明されている。これに反しアラビア語のハムゼは子音であって、その形が「エイン」の上半分であることが示すように、エインの音と同じ声門破裂音である。その転写は本論文では・とする。ラムトンは 9 節にあるように・としている。ハムゼはたいていアレフ、ワーウ、イエーのどれかを「支え」*bearer* として取る。これらの文字は発音には関係ない。ハムゼがどの字を支えとして取るかについては複雑な規則があり、その規則を覚えるよりは、支えも含めて綴り全体を覚えてお

く方がむしろ容易である。しかし本書でこの規則が詳しく説明されているし、アラビア語が「法的」*bā qā'ede^h*といわれる一例として、以下にハムゼの支えについての規則をまとめておく。まず「断絶のハムゼ」についてである。

(a) 語頭では支えはアレフである。例えば「命令」*'amr*, アラビア語では語はかならず子音で始まると考え、この語も・という音に始まるとし、この音を示すためのハムゼの支えとしてアレフを書く。しかしペルシア語ではこの語の発音は *amr* であって、語頭の母音 *a* を表すものとしてアレフが書かれる。

(b) 語中では次の三つの場合がある。

(i) ハムゼが無母音（ソクーン）の場合で、その支えはハムゼの前の母音と同系統 *cognate* の文字である。つまり

a . . . アレフ

o . . . ワーウ

e . . . イエー（点なし）

例えば

ra's アレフ 頭、家畜を数える単位

mo'men ワーウ 信者（*Amīr ol-mo'menīn* 信者たちの長、カリフ）

be'r イエー 井戸（ペルシア語では使われない。以下×で示す）

(ii) ハムゼに母音がつき、無母音子音のあとにくるとき、その支えはハムゼの母音の同系統の文字

mas'alat アレフ 問題（ペ. *mas'ale^h*）

mas'ul ワーウ 責任ある

mar'i イエー 見える

(iii) ハムゼに母音がつき、短母音または長母音のあとにくるとき

(ア) ハムゼの母音か、ハムゼの前の母音か、そのどちらかが *e* または *ī* であれば、支えはイエー。

khatī'at 罪（ペ. *khatīye^h*, *khatā*）

vasā'e'l 手段（複数）

so'ela 彼は尋ねられた ×

(イ) 上記以外で、上述の2母音のどちらかが *o* または *u* であれば、支えはワーウ。

so'al 質問

tā'ūs くじゃく

(ウ) 上記以外でハムゼの前の母音が *ā* でないとき、支えはアレフ。

sa'ala 彼は尋ねた ×

ta'ammol 考慮

(ㄱ) (ㄱ)のうちハムゼの前の母音が ā のとき、ハムゼの支えはなし。

qerā'at 読誦

以上の規則には例外がある。それは同じ文字または似た文字が連続することを避けるためである。例えば上記のうち(b)の(ii)の mas'ul の場合、ハムゼの支えとしてのワーウと、ū という長母音を示すワーウが、続いて書かれる。この同文字の連続を避けるために、前のワーウをイエーに変える。

また(iii)の(i)の t.ā'ūs も正しくはワーウを二つ書かねばならないが、一つだけにすることもあ

る。(ii)の mas'alat のハムゼの支えはアレフであるが、その次のラームと似て長い縦棒であるため、前者をイエーに変える。

(c) 語末

(i) 無母音または長母音の後では、支えはなし。

zav' 明るさ ×

shay' 物・事 × (ハムゼなしでバシュトゥ語にある)

sū' 悪、誤 (sū'-e-tafāhom 誤解)

(ii) その他の場合は上記(b)語中の場合の規則に従う。

184頁から「連続のハムゼ」の説明がある。ペルシア語としては人名がここで問題となる。

本書に引かれた例 'Abd ol-Qāder という人名について説明するところなる。この句は格語尾を無視すれば 'abd 'al qāder という語から成っている。'al はアラビア語の定冠詞で、そのハムゼは「連続のハムゼ」である。このハムゼが他の語の後に続くとき、ハムゼはその母音 a とともに脱落する。ただしハムゼの「支え」たるアレフの字は残る。以上が定冠詞'al の場合の「連続のハムゼ」の規則である。

次に197頁4節を見よう。そこには ḥobb ol-vaṭan-e という複合語が示されている。ḥobb が「愛」、vaṭan は「祖国」で、合わせて「祖国愛」という語になる。こういう複合語の場合、それを構成する最初の語の限定の主格語尾-o が保たれる。ただし一語が独立して用いられる場合、ペルシア語においてはアラビア語の格語尾はすべて省かれる。上の例でいえば、ḥobb ol-vaṭan-e の末尾にある限定の属格語尾-e がペルシア語では脱落する。さて184頁にもどって、'abd 'al qāder のうち、先に説明したように'a が落ちる。そして'abd の限定の主格尾-o が残る。したがって'abd ol-qāder となる。

この句の q は「太陽文字」でなく「月文字」 moon letter であるから、181頁4節にいうように定冠詞の l と同化しない。しかし例えば salām のように s という太陽文字で始まっていれば、同頁3節にいうように l は次の s と同化して 'abd os-salām となる。これも人名である。

さらに人名についていうなら Abol-Qāsem は、本来は abū 'al qāsem である。このうち'a は上に述べたように落ちる。またこの「連続のハムゼ」に先行する語の末尾の ū が短くなる。ū が短

くなると、アラビア語では u であるが、ペルシア語では o となり、かくて Abol-Qāsem となるのである。

もう一つ人名について述べよう。185 頁の人名「アリーの子ゼイド」を、語尾を省いてばらばらに書けば、Zaid 'ibn 'Alī で、これをアラビア語として続けて読めば、'i は「連続のハムゼ」で、音だけでなく文字アレフも消える。そして三語とも格語尾がついて、Zaid-u bn-u 'Alī-yin となる。これがペルシア語になると、まず格語尾がすべて落ちる。二重母音 ai は ei となる。'ibn は ebn となる。さらにこの ebn と 'Alī の間にエザーフェが入る。それで Zeid ebn-e-'Alī となる。124 頁「サッファール朝のレイスの子ヤアクーブ」の場合もそうである。

同様に歴史上有名な人物「イブン・シーナー」「イブン・ハルドゥーン」は、ペルシア語ではそれぞれ Ebn-e-Sīnā, Ebn-e-Khaldūn と発音される。

11 節 アラビア語名詞の語尾について女性を示す「ター・マルブータ」は、ペルシア語では、t, または発音されない h となる。ときにその両方が見られ、互いに意味の異なる語になるという説明である。

erāde^h 意志

erādat 敬意 erādat-mand 敬具（手紙の末尾に書く）

第15課

この課ではアラビア語最大の特徴である「三字根」を扱っている。すなわち三つ（まれに四つ）の根文字によって基本的な意味を作り、その根文字の順序が変わることなく、それに母音や子音が付加されることによってわずかな意味の変化を作る。この変化にも整然たる「型」があり、この点でもアラビア語はきわめて法則的である。

例えば KTB は「書く」の意味をもつ。

KāTeB 書記

maKTūB 書類

moKāTeBe^h 文通

KeTāB 書物

maKTaB 学校

アラビア語単語を見て、その中に KTB が含まれていれば、この語は「書く」に関係あると判断してよい。次にその語の型を考え、それと同じ型で意味を知っている語を思い出し、その型の意味を推測し、「書く」と結びつけると、その語の意味がほぼ正確に決定できる。

型を示すには「なす」の意の F'L で示され、また動詞を出すには三人称単数男性完了形たる Fa'aLa をもってする。

「型」には原型たる I 型から、派生型たる II から X までの型があり、各派生型が原型とどんな意味の関係をもつかが決まっており、本書190－191頁に説明されている。

各型の活用形の中でペルシア語にとって必要なのは、能動分詞・受動分詞・動名詞の三つである。本書では、原型の能動分詞と受動分詞（それぞれ型は一つだけ）は 188 頁に、原型の動名詞（その型は多い）は 188—190 頁に、説明されている。II 型以下は 192—193 頁の表に示されている。

原型たる I 型の両分詞の型は簡単だから覚えやすいが、その他の型はとても覚えられない。したがって覚える必要はない。ペルシア語中のアラビア語をそのまま覚えていく過程で、ときどき本書に従って自分の語彙を整理するだけでよい。

一例として ‘LM 「知る」 から作られる語でペルシア語でよく使われるものを示す。

I 型 能動分詞 ‘ālem 「知識ある」

受動分詞 ma‘lūm 「知られた」

動名詞 ‘elm 「学問」

II 型 I 型の自動詞を他動詞にする。したがって「知る」が「知らせる、教える」となる。

能動分詞 mo‘allem 「先生」

動名詞 ta ‘līm 「教育」

IV 型 I 型の使役、「知らせる、通知する」

動名詞 e ‘lām 「公示」

なお II—X 型の能動分詞と受動分詞を比べてみると、綴りは同じで、発音もよく似ており、唯一の相違は三つ目の根文字の母音が前者は e で後者は a であるということである。例えば 193 頁 X 型に見える語、能動分詞 mostaqbel は「迎えに行く人」であり、受動分詞 mostaqbal は「迎えられるもの、〔時制の〕未来」である。

191 頁 7 節にいうように、I 型能動分詞はペルシア語では、単数形は形容詞として、複数形は名詞として、用いられる。例えば

‘ālem 「知識ある」 ‘olamā 「知識人層」

9 節 根文字に付加される文字はきまっていて、それを「付加文字」*servile letters* という（序論 2 節）。ここでの説明は、VIII 型の動名詞の付加文字 t がその直前の根文字によって変るということである。発音に便利のためであろう。

	型	e Fte‘āl		
(a)	TB‘	e TteBā‘	T + t	e ttebā‘
(b)	DRK	e DteRāK	t → D	e dderāk
	ZHM	e ZteHāM	t → d	e zdehām
(c)	ZKHR	e ZteKHāR	t → Z	e zzekhār
(d)	TL‘	e TteLā‘	t → T	e ttelā‘
	SLH	e ŠteLāH	t → ṡ	e ṡtelāh
	ZRB	e ZteRāB	t → ṡ	e zterāb

第16課

この課で重要なのは 198 頁の 9－12 節である。

9 節 語内変化複数名詞は女性とみなされ、それを修飾する形容詞も女性になる。本書の例に似たものでよく用いられるのを示す。「外務省」を *Verzārat-e-Omūr-e-Khāreje^h* という。omūr は「事」amr の語内変化複数で、英語の *affairs* に当る。*foreign* に当る形容詞は khārej で、それに女性語尾としてアラビア語では「ター・マルブータ」-at をつけ、ペルシア語では H 字 -e^h をつける。したがって *foreign affairs* は omūr-e-khāreje^h となる。

10 節 「場所の名詞」の四つの型

QṢD	「目ざす」	maQṢaD	「目的地」
SJD	「礼拝する」	maSJeD	「モスク」
DRS	「学ぶ」	maDRaSat	(ペ. madrese ^h) 「学校」
QBR	「埋葬する」	maQBeRat	(ペ. maqbere ^h) 「墓」

他の例を挙げる。

SHHD	「殉教する」	maSHHaD	「第 8 代イマーム＝レザー殉教の地マシュハド」
GHRB	「日が沈む」	maGHReB	「西」

11 節 「道具の名詞」の三つの型で、ペルシア語でもよく用いられるものは少ない。

mesvāk 「歯ブラシ」

menbar 「説教壇」

12 節 「職業の名詞」の型は一つである。ペルシア語にたくさんある。

najjār	「大工」
ḥajjār	「石工」
baqqāl	「食料品商」
qassāb	「肉屋」
‘attār	「香料商」
ṣarrāf	「両替商」
naqqāsh	「絵描き」
khayyām	「天幕作り」(『ルバーイーヤート』の作者オマルの父)

いずれもその職業の人を指す。ペルシア語でこれに抽象名詞化の語尾 -ī を付けると、その職業またはその店を意味する。

本書には「パン屋」として *khabbāz* が示されているが、ペルシア語の *nānvā* が普通は用いられる。

第19課

第17・18課はアラビア語動詞のうちやや特殊な重子音動詞・ハムゼ動詞・弱動詞の活用について

て説明してある。この箇所はペルシア語から見てさほど重要でないから省略する。

3 節 アラビア語に特有の「両数」である。ペルシア湾に **Bahr-ain** という島がある。この語は「海」の両数である。普通の日本人はこれを英語流に「バーレン」と発音する。

4－9 節 語尾付加複数 *sound plural* が重要である。つまり語尾に **-āt** が付くものである。例えば **heivān** 「動物」→ **heivānāt**。この複数形はペルシア語には多くないから、単語ごとに覚えればよい。

第20課

この課はすべて語内変化複数 *broken plural* を扱う。これも単語ごとに覚えるしかない。223－227 頁に出ている例の単語で自分の知っているものに下線を引いておけばよい。ここに挙げられているものすべてがペルシア語でよく使われるとは限らない。本書から洩れているものでよく使われるのを挙げておく。

- 4. (a) **‘ellat** 「理由」 → **elal**
- 6. (a) **dars** 「学課」 → **dorūs**
ḥadd 「境界」 → **ḥodūd**
- 13. (c) **jens** 「品物」 → **ajnās**
- 15. (b) **rābete^h** 「関係」 → **ravābet^h**
- 19. (a) **amīr** 「総督」 → **omarā**

227頁 3 節 四字根語の語内変化複数

- (i) 単数形 **koukab** 「星」は女性の名
" **jouhar** 「インク」(複数が「宝石」)
複数形 **akāber** 「おとなたち」(ペ. **bozorg-sāl-ān**)

5 節 意味によって複数形が異なるものの例で、例えば **beit** には「家」と「詩の二行」の意味がある。前者はペルシア語では用いられない。詩の一行を **meṣrā‘** といい、それが二つで「ベイト」となる。一つのベイトが一つのまとまった意味をもつから、ペルシア詩を引用するにはベイトを出すのが普通である。

第21課

1－9 節は数を扱う。古典ペルシア文で年代をアラビア語で表現したものがあるが、現代文ではペルシア語風に表す。ただ「一」から「四」ぐらいまでの数についての語彙は知っておいた方がよい。

5 節 序数詞 **ṣāniye^h** 「二番目の、秒」英語の *second* も同じくこの二つの意味をもつのはなぜか？

6 節 序数副詞 1－3 は本書の説明にあるとおり、ペルシア語ではしばしば用いられる。

avvalan, s̄ānīan, s̄ālešan.

7 節 分数も知っておいた方がよい。

neṣf 「半分」, solṣ 「 $\frac{1}{3}$ 」, rob' 「 $\frac{1}{4}$ 」, 時を表す語として neṣf-e-shab 「真夜中」, rob' 「15分」

8 節 次の二語も図形の名として知っておくとよい。mosallas 「三角形」, morabba' 「正方形, 平方」, ついでに「円」は dāyere^h。

10 節 moshāron eleih 「上述の〔人〕」は, ū の文語として手紙文などで用いられる。

11 節 zū- は「……をもつ」の接頭辞で, 例えば zū al qarn-ain → zo'lqarnein 「二本の角をもつ人, アレキサンダー大王」

14 節 (b)(c) 独立した前置詞はペルシア語でも用いられるものが多い。

elā 「……まで」 tā の文語。

fī 「の中」はペルシア語の dar に当る。百分率(本書41頁)を, イランでは... dar ṣad というが, アフガニスタンでは... fī ṣad という。

varā' 「……の彼方」を使った語として Māvarā' on-nahr 「〔アム〕川の彼方の地, トランスオキジアナ」がよく知られている。

bābat 「……として」例えば bābat-e-māl ol-ejāre^h 「家賃として」

jāneb 「方」名詞として用いられて īn-jāneb 「当方, 小生」は man の文語。これに対し「貴殿」は ān-janāb. janāb は167頁(b)に説明がある。

zedd は「反対」を意味する。zedd-e-āb 「防水」

そのほか tavassot 「媒介」を前置詞に用いると「……気付」となる。

16 節(b)は名詞の対格形 -an がペルシア語では副詞として用いられるという説明であり, その例はすぐに思い出せるであろう。

(c) fe'l-four 「直ちに」この意味ではやはり four を使って, four-an, fourī とすることもできる。

be'lākhere^h 「ついに」はしばしば用いられる。綴りからは発音がむずかしいから注意すること。

上篇への補遺

序論

6 節はペルシア語のハムゼの用法の説明である。アラビア語のそれは182-185頁にある。

9 節は発音を示す記号の説明で, その名を覚えておかねばならない。「ファトヘ」= a, 「キャスレ」= e, 「ザンメ」= o, 「タシュディード」= 同じ子音が二重になる, 「ソクーン」= 子音だけで母音が見つからない。

第1課

12 節 ān と īn は, 時間的・空間的にそれぞれ遠いものと近いものを指す。

ān 「前者」, īn 「後者」

ān taraf 「向う側」, īn taraf 「こちら側」, ān vaqt-hā 「昔」, īn rūz-hā 「近頃」

第2課

3節(c) *rāst-gū* 「本当のことを言う〔人〕」の対は *dorūgh-gū* 「嘘つき」

bāzū-ān 「腕(複数)」はワーウが子音化して *bāzovān* ともなる。

第5課

15節 *šad-hā ketāb* 「何百もの本」、*hezār-hā gol* 「何千もの花」のほか、*dah-hā sīb* 「何十ものリンゴ」もある。後者は英語でなら *dozens of apples* となる。

第7課

1節の *cherā* は「なぜ」という疑問副詞のほかに、*yes* という訳語がついている。これは否定で問われて肯定で答える場合に用いられる。例えば「今日あなたは学校へ行かないのですか」と聞かれて、もし行くのなら日本語で「いや、行きます」と答える。この「いや」に当るのが *cherā* である。英語で *yes, no* の使いわけは、答えの文が肯定文か否定文かによる。日本語の「はい」「いいえ」は問いの内容を肯定するか否定するかによる。

第8課

1節にある *magar* は話者が自分の考えと逆のことを言って質問するときに用いる。

Magar in-tour nīst? 「おや、そのようではないのですか」(そのようであると思っていた)

Magar na-raftīd? 「おや、あなたは行かなかったのですか」(行ったのでしょうか)

アフガニスタンではこの語は「しかし」の意味で使われる。

72頁(vi)の例文「私は長い間起きていたので眠い」の文中の *neshashtan* は「坐る」という動作でなく、「寝ないで起きている」状態の意であろう。

訂正

ペルシア文レジュメはこの下篇のを正式とする。

87頁24行目 *mašammam* → *mošammam*

90頁9行目 *ferīb* または *farīb*

91頁5－6行目 *tofang* → *topānche^h* の代りに *bāgh* 「庭、果樹園」→ *bāgh-che^h* 「花壇」

92頁6行目 *ājer* → *ājor*

93頁11行目 *Nāder Shāh Afshār* → *Nāder Shāh-e-Afshār* これは本書124頁の表記のとおり
に書いたのであるが、人名とそれを修飾する部族名との間にはエザーフェがつく。例えば
Hasan-e-Balūch 「バルーチ人ハサン」

本書1974年以後の版には、275頁で終る索引の後に新しく頁をおこして、*A Key to Persian Grammar* として64頁分が付加されている。これは本書でペルシア語を独習する人のためである。即ち本書第1部の各章の末尾の練習問題、つまりペ文英訳と英文ペ訳の解答、および95頁以後のところどころにある読み物の英訳を与えてある。それに加えて新しい練習問題として、英文ペ訳の問題とその解答を示してある。

本書に収められた読み物は内容・表現ともに高度なもので、学習者はこれを深く学ぶことにより自分のペルシア語を一層高めることができる。著者の適切な配慮に対して読者は新たな熱意をもって本書に取り組むべきであろう。